「見者の手紙」に見られるデカルト あるいは感覚の復権

三　好　美千代

序

1871年5月15日付けで，ランボーは恩師ジョルジュ・イザンバールの友人ポール・ドメニーに手紙を送っている。それは，彼が詩人になる決意を述べていて，イザンバール宛ての手紙とあわせて「見者の手紙」と呼ばれている。それを読んで不思議な思いがするのは，十七才の少年が，通常は範とし，目指す目標とすべき先人達のことを，考えられないような大胆さで批評し，次いで思い切ったやり方でこれからの詩のあり方を論じていることである。こうした自信，あるいは確信を少年に与えているのは，いったい何であろうかという疑問が常に筆者に付きまとい。ふとデカルトをひもとく時，ランボーの手紙をかくあらしめた，モデルとしてのデカルトをそこに見出す思いがするのである。

さて，手紙の中でランボーはラシーヌを批判する。その口調は，『哲学の原理』の仏訳書序文の中でアリストテレスを批判するデカルトの口調と非常に似通っている。また，ランボーは普遍言語（langage universel）を語っているが，デカルトは、彼の学問上の話し相手、メルセンヌ神父に宛てた手紙の中で，概念に数学のような秩序を与えることができれば普遍言語（langue universelle）が可能であると語っている。そして，ランボーが普遍的叡智（intelligence universelle）を語る時，デカルトの言う普遍的知恵（sagesse universelle），すなわち生得観念が念頭にあってのものであるように思われる。いずれにしても，ランボーの手紙にはライト・モチーフとしてのデカルトが透けてみえる。その

各々について参照されるのは，『哲学の原理』の序文，1629年11月のメルセンヌ神父への書簡，『精神指導の規則』である。そういった検証の結果，「我とは他者である」という表現が，デカルトに対する哲学的立場からの反論というよりも，知覚というものを念頭においた，詩人としての反逆であったということがわかってくる。感覚という詩人の武器を手にデカルトに反逆しているのである。まずは，その経緯を見るため，デカルトの土俵に上がるランボーを見ていこう。

第一章　新しい方法論へ

ドメニー宛ての手紙で彼は次のように，論を始めている。

> 「——これから書くのは詩の未来についての散文です——古代の詩はいずれもギリシャ詩にたどり着きます。調和のある生活です。——ギリシャからロマン主義運動までと——中世には——文人，作詩屋がいました。エンニウスからテロドデュス，テロドデュスからカジミール・ドラヴィーニュまですべては韻を踏んだ散文であり，遊びであり，数限り無い愚かな世代の衰退と栄光です。ラシーヌは純粋で，力強く，偉大です。——彼の脚韻を吹き消し半句を狂わせれば聖なる愚者も今日では，その起源となるものを書いた人間と同じくらい無名でいたことでしょう。ラシーヌ以降は遊びにも黴が生えています。二千年も続いたのですから。」

このように古代を，先人達を何の躊躇もなく断罪するのを，ランボーの性癖に帰するだけでこと足りようか。ギリシャに始まり現在までといった図式はなにかモデルのようなものがあったと考えてもよいのではないだろうか。この疑問に答えてくれるのはデカルトのように思われる。イザンバール宛て，ドメニー宛ての手紙にはいずれにもデカルトの自我論を仄めかす表現があるからである。

さて，『哲学の原理』のフランス語訳への序文，仏訳者クロード・ピコ師に宛

てた手紙（1647年）のなかでデカルトはアリストテレスを断罪している。以下，その部分を引用する。

>「我々に著作の残されている最初のかつ最も主要な哲学者はプラトンとアリストテレスですが，この両人の間には，ただ次のような違いがあるだけです。すなわち，プラトンは，その師ソクラテスの後を追って，率直に，自分がまだなにひとつ確かなものを見出しえなかったことを告白し，自分にとって真らしいと思われる事柄を記すだけで良しとし，その目的でいくつかの原理を仮定し，それによって他の事物を説明しようと努めたのです。これにひきかえアリストテレスのほうはそれほど率直ではなく，二十年間プラトンの弟子であり，彼には師から学んだ原理だけしかなかったのにも関わらず，その説き方をすっかり変えてしまい，これらの原理を真で確実なものとして示したのです。彼自らは，決してそれらを真で確実なものとは思っていなかったらしいのに。」

そして，彼らに追従する弟子たちは，後の哲学者達も含めて，自分たちが完全には知っていない事柄を原理にしており，そのためそこから演繹されることも明証的ではないとして批判される。アリストテレスからその流れをひくスコラ哲学までを批判する調子は，ランボーのそれに似通っている。

「アリストテレスの原理が偽であることを証明するには，幾世紀にわたって人がそれに従ってきたのに，それによって何の進歩もなしえなかったことを指摘するのが，最上の策でありましょう」というデカルトは「ラシーヌ以降は，遊びにも黴がはえています。二千年続いてきたのですから。」と詩について述べるランボーに重なる。

『哲学の原理』はデカルトが48才の頃のものである。デカルトが行う批判は長年の熟考の結果の論理的帰結であるが，ランボーに時間をかけ全てを検討し自らの論理を練り上げてゆく時間があったとは思われない。自分の直観的確信をデカルトの議論の展開の形式に当てはめて説得力のあるものにすること。おそらくはデカルトのその文章がなければ，議論はもっと別の形を取っていたのではないかと思われる。以上，本論の出発点となる仮定として重要であるので

最初に述べるものとする。

第二章　デカルトにとっての詩人

デカルトは，「1619年11月10日，霊感に満たされて，学問の驚くべき基礎を見出した・・・」の一文で始まる自分の夢を記したラテン語になる手記を書いている。デカルトの手稿を書き写した断片部分が残されており，そこでは詩人と哲学者が対比されている。

> 「想像力（imagination）は物質を思い描くのに形（figure）を用い，叡智（intelligence）は精神的なものを思い描くのに，風，光といった，触知できる幾つかの物質を用いる。そこから，我々はより高次の方法で哲学することで，認識（connaissance）により，精神をその高みへと導けることになる。深遠な思考が，哲学者の書いたものの方ではなく，詩人の書いたものの方に，見出されるのは驚くべきことのように思われる。その理由は，詩人達が情熱と想像力の支配のもとで書いたためである。我々の中には，火打石の［中に火がある］ように知識の種子（semences de science）があり，哲学者たちはそれを理性で引き出すが，詩人達は想像力でもぎ取る。そしてそれはさらに輝くのだ。」（ガルニエ版の仏訳による）

知覚や思考によらない「直観的想像力」が詩人の持ち分であり，哲学者は「論理的認識力」すなわち理性が持ち分であるとデカルトは述べているのだ。この引用部分は，1859-1860年の Auguste Durand 社からデカルト未出版作品として出版されており，ランボーの目に止まったことは充分考えられる。しかし，この部分がランボーの目に止まらなかったとしても，知識の種子（semences de science）に関しては『精神指導の規則』規則四のなかで次のように言及されている。

> 「つまるところ人間精神は，何かわからないが神的なものを持っていて，その中には有益な思想の最初の種子（premières semences des pensées utiles）が蒔かれてお

り，しばしば，それを誤たせる研究によって，いかに捨て置かれ，窒息させられていても，おのずから実をむすぶものなのである。このことを私達は，最も易しい学問すなわち数論と幾何学の中に認める。・・・他の学問では，より大きな障害が，通常それら果実を窒息させている。」

また，『精神指導の規則』規則一には次のように書かれている。

「多くの人々が人間の習俗，植物の特性，星の運行，金属の変質，その他この種の学問対象を，きわめて綿密に研究するのに，ほとんど誰ひとり，良識（bon sens）すなわち普遍的知恵（sagesse universelle）について考えないということは，私には実に奇妙なことに思われる。というのは，知恵以外のすべての学問は，それ自身がというよりも，それらがその知恵に寄与するので，尊ばれるべきだからである。」

このような考え方をランボーはドメニーに宛てた手紙の中で取り入れている。

「普遍的叡智（intelligence universelle）は常に自らの思想を蒔いてきました。人々は脳髄のこの果実の一部を拾ってきました。それによって行動し，それについて本を書いてきました。人々は，自らを探究せず，まだ目覚めず，おおいなる思索の直中にも居らず，そんな歩みを取ってきたのです。官吏，物書きといった人々はいました。作家，創造者，詩人といった人々は存在しなかったのです。」

デカルトの普遍的知恵（sagesse universelle），あるいはその言い換えである良識（bon sens, bona mens）といった用語が，ランボーにおいては普遍的叡智（intelligence universelle）に書換えられている。この書換えはデカルトの詩人に関する断片が読まれたことを示唆しているとも考え得る。デカルトによれば，詩人は semences de science から想像力によって深遠な思考をもぎ取るのだと言っているのに対し，ランボーは普遍的「叡智」により，拾ってくると言っているのだから。その書換えには，デカルトに対するランボー独特の皮肉

をこめた諧謔もあるように思える。intelligence は感覚を受容し，理性により判断を下す能力で，imagination とは違い哲学者の領分であるのだから。さて、ランボーのこのような態度は、当然、哲学者の語る言語に対する考え方にも及ぶ。

第三章　普遍言語

デカルトはメルセンヌ神父に宛てた1629年11月20日付けの手紙の中で普遍言語について語っている。誰が語ったか明確ではないが，デカルトは次のように手紙を始めている。「新しい言語のその提案は一見すばらしいようですが，注意深く検討してみると私にはそう思えません。」提案された新しい言語とは，例外のない，慣用に毒されていない，名詞，動詞の変化は接辞で行われる文法規則を持った，６時間もかければ，普通の人が辞書を片手に使えるようになる言語である。そして，それに対し，様々な矛盾点が指摘されるのだが，それに続いてデカルトは自らの普遍言語（langue universelle）について語る。それは，思考に全ての人間に理解できるような秩序——未知の言語でも，数字を一日学べばどんな数字でも表すことが出来るようになるが，それと同じ様な秩序——を与えることによって出来る言語である。そして，その役割は，正しい科学を手にするために必要な最大の秘法，真の哲学に委ねられる。その哲学によって，人間のあらゆる思考はそれが明快単純であるように区別されるだけでなく，数え上げられ，順番がつけられねばならない。

「そして，もし誰かが人々の想像の中にある単純な諸概念が何であるかをはっきりと説明し，その諸概念から人々の考えることが組立てられ，すべての人に受け入れられれば，私はそれに続いて，学び，話し，書くのが非常にたやすく，そして，これが肝心なのですが，どのようなものをも非常にはっきりと表して判断を助けかつ，

それを誤ることがほとんど不可能な普遍言語が現れるのを躊躇なしに期待するでしょう。ところが，私たちの持っている言語はといえば，全く逆で，ほとんど混乱した意味しか持たず，人々の精神はずっと以前からそれに慣れており，それがほとんど何ひとつ完璧に理解できない原因となっているのです。」

そして次のように結んでいる。

「さて，このような言語は可能ですし，それによる科学も見出せるでしょうし，その言語の助けによって，農夫も，現在は哲学者しかやっていませんが，物事の真実をよりよく判断できるようになるだろうと私は考えています。しかし，決してそれが現実のものとなるとは考えてはいけません。それは物事の秩序の大きな変化を前提とし，世界全体がひとつの地上の楽園とならなければならないでしょう。それは物語の国でだけで考えられることです。」

さて，ランボーはこの langue universelle を langage universel に書換え，ドメニーに宛てた手紙の中で次のように語る。

「ですから，詩人はまさに火を盗むものです。人類に対して，動物に対してすら責務を負っています。自分の見つけたものを感じさせ，触れさせ，聞かせなければなりません。向こうから持ってきたものに形があれば，形を表し，形がなければ，形を与えなければなりません。言語（langue）をみつけなければなりません。

さらに，どのようなことが話されてもそれは概念ですから，普遍言語（langage universel）の時代が来るでしょう。」

動物を出してくるのはデカルトが念頭にあったと思われる。動物は人間のように理性を持たない故に機械と同じなのだ，ということをしきりに繰り返すデカルトに対するこれもランボーの諧謔であろうか。動物も感覚を通して，詩人の持ち帰るものを享受することが出来るのである。感覚を受容する肉体と，純粋思考としての精神を切り離すデカルトに対する異議である。そして，ランボーは langue universelle を langage universel に書き換える。意味内容の変換

である。エスペラントのような言語を作ることではない。一つの言語（langue）を内部から変革し，新たな言語となすことを言っているのだ。

「どのような言語であれ辞書を完成させるには――化石より死物と化した――アカデミシアンでなければなりません。弱い者はアルファベットの最初の文字を考え始めただけで，狂気に陥ってしまうでしょう。」

デカルトが必要としていたのは「アカデミシアン」ではなく，「真の哲学」をするものであった。用語は改変されている。ランボーが必要とするのは，辞書の編纂にたずさわるアカデミー・フランセーズの会員である。一つの言葉が持つメッセージは詩人においては，無限である。詩人にとっては，「混乱した意味しか持たない」，感覚を要約する言語が重要なのである。

「その言語は，魂から魂へ向かい，香り，音，色のすべてを要約し，思考の言語となり，思考をとらえ，引き寄せるでしょう。」

デカルトにとって，物の香り，色，音等は，感覚器官によって捉えられ，かつ蜜蠟が様々な条件のもとで変化するように，同じ対象に知覚するものであっても変化しうるものであり，人間の判断を誤つ感覚は，物の概念（idée）を捉えるのには寄与しない。物の概念を捉えるのに奉仕するものは，精神のみによる洞見（inspection）である。（省察二）。感覚をも伝える言語というのは概念を語る哲学者の言語に対する詩人の言語である。そして，ボードレールの『コレスポンダンス』では象徴の森を介して自然を通る時，その場所でお互いに呼応しあうものは香り，色，音といった感覚によってとらえられる要素である。詩人は知覚を，「未知のもの」の概念を捉えるのに奉仕するものと考え，その概念を表す言語が可能であるという。いずれにしろランボーにとって重要なのは，ものの概念を表す言葉というよりも，感覚を惹起する言葉であり，「真の哲学

者」に用はない。ここに，感覚をものを把握するための根拠としないデカルトと，ランボーを分かつものがある。感覚を伝える言語という一点で詩人の言語は哲学者のそれとは違ってくる。誤つ感覚でいいのだ。詩の言語とは感覚を伝えるものである。そして彼はデカルトの純粋思考のレベルに感覚を格上げする。ランボーは続ける。

> 「詩人は自らの時代に普遍的魂のうちに目覚めつつ，未知なるものの量を示すことになるでしょう。彼は，自分の思考の形式以上のものを，自分の進歩への歩み以上のものを与えることになるでしょう。法外さが常態となり，全ての人に理解され，彼は進歩を乗速させる者となるでしょう。」

「普遍的魂（âme universelle)」という用語はデカルトが良識（bon sens）をさして「普遍的知恵（sagesse universelle)」といっているのに通底する。知恵を魂に置き換えるランボーは，哲学者としてではなく，詩人として真理の探究に乗り出すものである。『花について詩人の語ったこと』『母音』等の試みは，非常に突飛なものであるが，物と，精神のみによる洞見（inspection）からくる概念ではなく，物と，知覚からくる概念を結び付けようとする試みであるように思われる。哲学者が肉体を離れた思考を選ぶとすれば，詩人は肉体と結びついた感覚を選ぶ。量を示すという表現はやはり哲学のものである。数，大きさ，重さ，程度，速さなどが量で，それは事物の属性であり，それらが物を把握させる。デカルトは『省察五』において，物を規定する量，延長，数，運動とその持続等を語っている。「未知なるものの量を示す」とは，感覚によって捉えられた「未知なるもの」を把握させるということになる。

デカルトにとっては，詩人において想像から来る概念を伝えるものであった言語がランボーにおいては感覚からくる概念を表す言語となる。ランボーの目指す試みは，あくまで，既成の言語に依存したものであり，それは理性に奉仕する言語ではなく，感覚に奉仕する言語である。しかし，感覚を伝える言語と

いう考えの対立項にデカルトの普遍言語の考えがあったのは確実に思える。彼の確信を導いたのは，ボードレールであり，ユゴーであっただろう。哲学の言語が詩の言語に取って変わられる。そうした議論が必要になったのは韻文詩のなかには収まりきらなくなった近代的感性の側からの要請をランボーが感じとっていたことによるのだと思える。

第四章　もう一人の我

一番重要なことに，論を進めなくてはならない。ランボーの手紙が以上見てきた限りにおいてデカルトを意識したものであるとすれば，イザンバールに宛てた「我考えるというのは誤りです。我において考えられる（On me pense）と言うべきです。――言葉遊びをお許しください。――我とは他者なのです（JE est un autre)。」といった部分，また，ドメニーに宛てた手紙の「何故なら我とは他者だからです」といった表現をどう解釈するかという問題になる。

そうしたことを，念頭に置いた上で，「我とは他者なのです（JE est un autre.)」（プレイアド版のイザンバールに宛ての手紙の中では JE で復元されている。ドメニー宛ての手紙では Je となっている）という表現を考えてみよう。

まず，JE はすでに人称代名詞の Je ではない。この私という個別なものではなく，普遍化した JE である。この JE に「もう一人の我（un autre Je)」が置換されるということである。Je pense の Je を置き換えれば Un autre Je pense となる。ランボーは Je pense というのが間違いだというのだからこの un autre Je は本来の JE のいるはずの，精神の内部の場所で考えることになる。On me pense. との距離はどう計ればよいのだろうか。On me pense は，①「人は私のことを考える」と解釈できる。ガルニエ版の注では Je est un autre を，単に自分といったものは，他人が見た者とは違うというだけのことだ，と解説しているので，On me pense を「人が私を考える」と理解することになる。他方，②「人は私において（me を à moi，chez moi に解釈して）考

える」といった解釈も可能である。雪華社の『ランボー全集』ではそちらの訳を採用している。又、ラッセルは『哲学史』の中で、デカルトは「思考」があると言うべきだったと述べている。人称のない思考である。ランボーはそれを不特定の人称 on に置き換えたと考えてよいだろう。結局，on はもう一人我 un autre Je なのである。この「もう一人の我」を「詩人」に置き換えればどうだろう。詩人が自我の場で考えるのだ。さすれば，デカルトが普遍的知恵という場合，どう考えれば良いのだろうか。普遍的知恵が「知識の種子」の果実を手にするのである。ランボーにおいてはそれは感覚を伴った普遍的叡智となる。「我とは他者である」とは「我とは普遍的知恵（sagesse universelle）ではなく，普遍的叡智（intelligence universelle）だ」と言っているのではないだろうか。

「僕は，僕の思想の開花に立ち会っています。」というとき，この「僕」は普遍的叡智であるとしよう。次の「僕」は ma と所有形容詞になっていて，「思想（pensée)」を限定する。普遍的叡智の思想が開花するのである。叡智にはデカルトの断片で見たように感覚が付与される。普遍的知恵ではないのだ。既に，生まれながらに付与されるべくして存在しているものではないのだ。それは，動く意識であり，感覚を通して得る思考の開花に立ち会っているのだ。

ドメニー宛ての手紙で普遍的叡智という言葉は「我とは他者である」とランボーが述べた後で出てきており，普遍的知恵ではない，感覚を受容するもう一人の我が確認された後ということになる。我は考えるのだ。しかし，その我は感覚を受容する我なのだ。それが「我において考えられる」といった他律性を表す言葉となる。この「他者」は「見者」「火を盗む者」「偉大な病者，偉大な犯罪人，偉大な呪われ人」「至高の賢者」となる可能性を秘めた「我」である。「我考える，故に我あり。」と言って収まり返っているわけにはいかない。我が何であろうとするかが問題なのだ。一見，非常に他律的に見えながら，それは主体性の確立の論理なのである。他律的なのはコギトの論理なのだ。「我は詩人である（Je suis poète)」というのは，間違っている。「我とは一人の詩人である

(JE est un poète)［ランボーが手紙でアクサンなしの poete 使ったり，o と e をコンポーゼの形で用いたり，poëte としたりしているのと無縁ではあるまい。］」と詩人は言うべきなのだ。sagesse を intelligence に置き換えたところで「我考える」が変わるものではない。感覚により変容した我はやはり考えているのだ。哲学的な論証ではない。これはデカルト哲学に対する，感覚を選んだ詩人の反逆なのだ。生まれながらに与えられた普遍的知恵を否定することは神に対する反逆でもあるのだ。

彼は「銅が目覚めてラッパであったとしても彼のせいではない」と言う。ここに時間の軸を入れてみよう。ランボーのいう「他者」は置換可能な思考する者なのである。時間の軸に沿って様々な感覚を受容し，変貌を遂げる我。これは肉体と精神の結合にほかならない。デカルトによって肉体から切り離された精神。デカルトにとっては空間の延長にすぎなかった肉体を感覚を通して直接に精神に結び付けるのだ。そして，感覚を極限に受容することにより，この他者，すなわち普遍的叡智としての自我はその全体像として発現が可能となる。

「詩人は，あらゆる感覚の，長期にわたる，広範な，理性的錯乱（long, immense et raisonné dérèglement de tous les sens）を通して見者となる」とランボーは言う。感覚（sens）は当然，意味（sens）も内包するものである。詩の言語においてある一つの単語から受ける感覚の多様性は，その単語の意味の多様性となる。ランボーはあくまで，普遍的知恵ではない，感覚が生起し，思考が自由な動きをする自我を要求したのである。

> 「僕は自分の思考の開花に立ち会っています。それを眺め，それを聞いています。弓を一弾きします。シンフォニーが奥の方から聞こえ出すか，一挙に舞台に飛び出すかします。」

そう言う時，彼が求めるのは感覚である。しかも，その感覚は通常の外的刺激による感覚ではなく，「錯乱」させられた，あるいは開放された感覚なのであ

る。それによって初めて,「未知なるもの」を摑み取ることが出来るのだ。この「未知なるもの」はデカルトの言う普遍的知恵によって見出されるものではない。普遍的叡智があらゆる感覚を検証しつくした結果,見出されるものなのである。

終わりに

ランボーの詩作活動あるいは詩の内容には形而上学的な内容を含み持つ部分が多分にある。哲学と文学は自ずから異質のものであり,それがランボーにおいてどういった形で感性に訴える作品となっていくのか,どう消化吸収されていくのかは,興味深い問題である。言葉に対する詩人の厳格さ,思考を組み立てる能力,そうしたものを信じなければ,手紙の解釈あるいは詩の解釈は不可能となるだろう。ただ,それらは説明なしに,突然あらわれる言い回し,用語によって表され,我々を戸惑わせる。

手紙に見られるように,形而上学を真向から取り上げながら,それを,詩の論理で押し切る。感覚を復権し,言語を感性の側に取り戻すこと。哲学者としてのデカルトを否認するのではない。詩人として,哲学者に対峙するのだ。詩人に関して,デカルトの考えていることは間違っている。想像力で詩を書くのではない。感覚によって書くのだ。デカルトのいう普遍言語などに用はない。言葉は生きているのだ。一つの言葉が持つ可能性は普通の辞書などでは考えられぬほどに詩においては無限なのだ。そして,感覚もそれに応じて無限なのだ。そうした論理は哲学者としてのデカルトに哲学で反論するといった性質のものではない。反逆なのである。その反逆は,当然、神に対する反逆に通じ,詩人は「火を盗むもの」となるのである。

こうした議論は彼の詩に当然あらわれてくるだろう。「我」は「酔いどれ船」となる。未知のものを見る。様々な感覚にさらされる。美しきものであるはずの花が,「詩人」によって語られれば猥雑なものに変貌する。言葉の単位ではな

く，「母音」という音の単位にまで，詩人の感覚は及ぶ。

哲学者デカルトと詩人ランボー。筆者自身の力不足による，議論の誤りはあるかもしれない。哲学に関しては，全くの門外漢である。しかし，デカルトが，詩人の手紙の中で語られているのは確かである。ここに述べられたことだけでなく，デカルトの語ったことの仄めかしは本論と同じく，筆者の仮説の範疇にある。それについては次回に譲ることにする。

引用文中の翻訳の誤りは筆者が負うものである。

参考文献

Rimbaud “Œuvres” par S. Bernard et A. Guyaux: Classiques Garnier : 1983

Arthur Rimbaud “Œuvres complètes” par A. Adam : bibliothèque de la pléiade : Gallimard : 1972

“Œuvres philosophiques de Descartes” tome I, II, III : Classiques Garnier : 1967

Arthur Rimbaud “Lettre du voyant” Gérald SCHAEFFER, Marc EIGEIGELDINGER : Librairie Droz et Librairie Minard : 1975

『ランボー全集Ｉ』人文書院：1976

『ランボー全集』雪華社：1970

『世界の名著：デカルト』野田又夫編：中央公論社：1967

『精神指導の規則』デカルト：野田又夫訳：岩波文庫：1950

『哲学事典』平凡社：1971

現代思想1981・3『ニーチェの主題，フーコーの変奏』田村俶：1950

ユリイカ1991・7『ランボーの詩的な定式とカント哲学』ジル・ドゥルーズ

（関西学院大学博士課程後期修了）